

特別活動は異年齢交流活動を通して子どもを育てます

一昔前までは、空き地や公園で、大きい子どもから小さな子どもまでが一緒に遊ぶ姿を目にすることができました。遊びのなかで、小さな子は大きなお兄さんお姉さんへの憧れを、大きな子は小さな子への思いやりを育て、さまざまな多様なものたちがともに楽しめる活動を見出し、子ども達は成長とともにそれらの遊びを伝承していきました。しかし、今は異年齢の子ども達で遊ぶ機会はほとんどなくなっています。実際の社会では、異年齢の集団で生活するにもかかわらず、多くの学校では同年齢の集団が中心で生活が構成されていることで、社会との橋渡しをすることが難しいという現実があります。イェナ・プラン教育やドルトン・プラン教育など、異年齢の集団での学びを教育課程に組み入れていることをウリにする教育運動もあるほどです。

特別活動は、同年齢や異年齢による様々な集団が組み合わせられて構成されています。江戸時代の寺子屋や私塾などの教育、大正の自由教育、戦後の初期社会科やコア・カリキュラム運動などの教育文化の結晶として形成されてきた特別活動には、少人数から大人数、同年齢と異年齢などの集団で、触れ合い学ぶ様々な場が歴史的な学校文化の知恵として存在しています(注)。

特別活動の活動集団の分類

小集団 (主にクラス単位)	中集団	大集団
集会 (お楽しみ会など)	委員会	児童集会 / 生徒集会
当番活動	児童会 / 生徒会 (執行部)	学校行事 (学校規模)
係活動	クラブ活動	運動会・学芸会など
学級活動 (ホームルーム活動)	学校行事 (学年単位) 修学旅行など	

※黄色のマーカーが異年齢交流活動

異年齢交流活動で成長する子ども達

たてわりで遊ぶときには、「いやだ」「やりたくない」という子がでないように工夫した。たとえばドッジボール。男子は左手で投げるというルールにすると男子が楽しめなくなってしまう。だから当たっても痛くないように柔らかいボールを使ってやることにした。同じ班の6年生ともたくさん相談した。そのうちみんなもみんな楽しんでくれる工夫を考えてくれるようになった。たてわり班会議では、1,2年生は自分から発言ができなかったりするので、6年生と5年生の間に座ってもらい、何をいったらいいのかわからないときは、こんなことをいったらいいんだよと例を出したりしているうちに、1,2年生も発言できるようになった。(中略)私もいつの間にか、人前で話すのが前より平気になった。これは成長したのではないかと思う。自分自身もだし、この班自体もだ。(八王子市立N小学校の卒業文集より)



注:報告書『近代以降の学校教育と特別活動-日本の学習指導要領に着目して-』(R5.3.8):日本特別活動学会 課題研究プロジェクト「特別活動研究の研究史的メタ分析と特別活動原論の整理」監修

※この報告書は日本特別活動学会ホームページで閲覧可能。<https://jaseatokkatsu.jimdoweb.com/>